

【優秀賞】

団体名	グッジョブおきなわ推進事業局
活動の内容（概要）	グッジョブおきなわ推進事業局では、「沖縄型ジョブシャドウイング」をツールに、産学官・地域が連携する仕組みを作り、開かれたキャリア教育に取り組んでいる。事業局は県内10市町村に設置した協議会と連携し、各地域の情報を集約するハブ機能を担っていることから、キャリア教育の実践事例集積が行える。また、キャリア教育で身につける「生きる力」が必要となる最初の選択は、中学校での現実的な進路選択を迫られる瞬間にあることから、小中学校でのキャリア教育が重要と考えている。このような機能と考えを持つ事業局が事例の効果検証を行うことで、学校の特徴を捉えたキャリア教育実践の支援に取り組んでいる。

受賞理由

- ・当該事業局は、地域の課題を踏まえ、様々な校種、企業、団体を結びつける役割を適切に担っている。
- ・沖縄県全体で「沖縄型ジョブシャドウイング」を軸としたキャリア教育を推進しており、広報活動、規模、参加人数等、他県での実践に与える影響が大きい。
- ・発達段階に応じたジョブシャドウイング、大学生が小学生の実施に協働するという発想が素晴らしい。
- ・地域の小中高で体験活動を中心とした体系的なキャリア教育が実施されている点が素晴らしい。また、各家庭も含め、それぞれの組織が担うべき役割が明確になっており、計画も十分に練られている。
- ・若者の就業が極めて厳しい県にあって、産官学あげて状況を改善しようとする熱意と努力を評価する。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

小学校48、小中学校4、中学校16、高等学校3、大学4、教育委員会・教育事務所24、沖縄県教育庁、沖縄県教職員組合2、その他3

【行政】

沖縄市グッジョブ協議会7、北中城村グッジョブ地域連携協議会5、与那原町地域雇用推進協議会5、石垣市グッジョブ連携協議会10、久米島町グッジョブ連携協議会7、名護市グッジョブ連携協議会7、うるま市グッジョブ連携協議会5、なはグッジョブ連携協議会5、豊見城市地域雇用創造推進協議会ジョブシャドウイング部会6、宮古島市グッジョブ連携協議会6、竹富町産学官連携会議3、伊江村地域連携グッジョブ会議6

【地域・社会】

PTA団体等2

【産業界】

沖縄県中小企業家同友会、観光協会、商工会、商工会議所、漁業協同組合、農業協同組合、地場産業協同組合、青年会議所、建設業協会など



産学官地域連携の協議会の様子

活動開始の経緯

沖縄県は平成 19 年度から沖縄県産業・雇用拡大県民運動「みんなでグッジョブ運動」を展開し、雇用情勢と完全失業率の改善に取り組んでいる。その運動の一環として、観察型キャリア教育「沖縄型ジョブシャドウイング」が県内の小中高校でスタートした。このプログラムは、「若年者の雇用環境の厳しさ」に着目し、児童生徒の頃から「働くこと」に向き合い、働くことの意義や大切さを考える体験を通して働くことに憧れを持たせることを目標として、4 年間実施された。平成 23 年度からはモデル事業の検証を踏まえ、地域が主体性を持って地域連携体制の構築をするための支援事業へと発展した。

当事業を実施するに当たり、県内 10 地区を拠点地区として選定し、取組みの要となるコーディネーターの育成や活動の支援を行い、これらの取りまとめ機関として「グッジョブおきなわ推進事業局」(以下、事業局という。)を設立した。事業局はコーディネーターの育成支援に併せて、拠点地区の情報集約や事例の効果検証等によりノウハウを蓄積し、拠点地区の支援体制に努めている。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

学校法人興南学園興南中学校(以下、興南中学校という)における取組み事例を挙げる。

興南中学校では職場見学や職場体験、インターンシップといった就業に関する体験学習のプログラムが必須となっており、多様な大人から学ぶ機会が少ないため、多くの大人との接点を作ることがコミュニケーション力や多様な価値観を育むきっかけになると考え、効果検証を行った。その際、興南中学校と地域企業との連携体制を築き、関係機関による継続的な支援体制の構築も念頭に置いて、興南中学校を中心とした取組みを支援した。

連携体制の構築では広範にわたり協力を呼びかけ、産業界や企業には職業人講話での講師や職場体験の受入先としての協力を依頼した。依頼の際、職業や就業について考える機会が十分でない興南中学校の現状を伝えたところ、地域人材育成の一環として貢献していくという共通の目的意識を持つことができた。その結果、業種業界の壁を越えた企業開拓が可能となり、開かれたキャリア教育の支援に地域企業も積極的に関わる様子が見られ、興南中学校と地域企業とのネットワークの構築に向けた新たな一歩が踏み出せた。さらに同窓会組織も活用し、連携の輪を広げた。同窓生という生徒にとって身近な存在と関わることを通して、自身の進路をイメージし、今何をすべきかを考えることにつながった。

ジョブシャドウイングプログラムで様々な関係機関と連携し、地域を通して世の中を知ったり見たりする経験は、職種や働き方の多様さを知ること、社会の広がり気づくことにつながり、自分と社会との適切な関係を構築していく力を育む支援につながることが分かった。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

八重山商工高等学校の取組事例から説明する。

ここでのジョブシャドウイング実施対象の生徒は、専科を踏まえた進路選択ではなく、公務員を強く志望する生徒達である。島内には働く場所が少なく保護者も公務員を強く勧めていることから保護者・生徒の就業の選択肢を狭める結果となるとともに、生徒自らが主体的に就職先の決定を行ったという自覚に乏しく、職業選択の際に安定性を重視する傾向にある。そのような生徒に対し、当プログラムの実施を通して希望している公務員の魅力と実際を見せ、そこから何を選択し、決めていくべきかを気付かせるきっかけとした。その結果、中学校の段階で「自分で決める大切さが分かっていること、自分の決断に責任を持ち、進路決定を行えること」が重要であることが分かった。この検証結果を踏まえ、事業局では、中学校でのプログラム開発を行っている。

次に、産学官・地域が継続的に連携していくための仕組みの基盤構築と、地域支援事例から説明する。

沖縄県全域で地域連携型キャリア教育を展開するにあたり「沖縄型ジョブシャドウイング」（以下、ジョブシャドウイング）というキャリア教育の手法を用いて、産学官ならびに地域が連携した人材育成の基盤や仕組みを、地域が主体性を持って取組んでいくことを目指している。本取組みでは、沖縄県全域に取組みを汎用的に活用していくことを目指し、地域別で事例をサンプリングして検証していくことを目的に、県内北部、中部、南部、離島の中から10地区を拠点地区として選定し、市町村単位での「産学官・地域連携協議会」（以下、協議会）と、連携の要となるコーディネーターを設置し、仕組み構築を目指している。

市町村単位で発足の協議会は、キャリア教育や人材育成は地域活性が活かされた取組みが重要と捉え、市町村首長等を会長に、経済団体、教育、行政機関、NPO等で構成されている。ジョブシャドウイングの実施主体は「協議会」が担い、企業開拓は経済団体主導で行うなど役割を分担することでキャリア教育の支援を行っている。年3回開催される総会では、ジョブシャドウイングの報告や成果の検証のみならず、地域の地理的、歴史文化的背景や産業雇用環境を踏まえ、地域課題の共有、地域や産業に貢献できる人材像育成の方法についても熟議している。コーディネーターには、様々な関係者との接点を開拓し、キャリア教育の重要性を伝え、相手の立場に立ち、関係者を巻き込んでいく能力が求められる。また、学校と地域の橋渡しであるコーディネーターは、児童生徒の「教育から社会への移行」の礎であり、その育成には「グッジョブおきなわ推進事業局」（以下、事業局）が携わり、3年間にわたる協議会の設置や運営、連携の仕組み構築などの支援を行っている。支援を終えた地域は、各市町村での取組みを展開している。名護市では、地域プラットフォームとしての機能を発揮し、ジョブシャドウイングを含む就業体験に関する窓口一本化の仕組みができつつある。また、うるま市では早期から地域産業に目を向けながらも広い視野を持った人材の育成を行うため、産業界が主体性を持った展開を行っており、企業や経済団体と連携し就業体験フォーラムや職場体験の支援を行っている。

さらに、産学官・地域連携協議会を中心とした地域連携の動きは、伊江村や竹富町等にも波及しており、協議会の設置・運営支援、連携の仕組み構築にも引き続き事業局が携わっている。

このように、事業局に各地区の事例を集約し蓄積することで、地域の特色を活かした地域連携の仕組みづくりの基盤構築を行え、各地区の活動が円滑に進むよう支援できると共に、支援を終えた地域に対しての自立支援も行い、継続した地域連携の支援体制を構築している。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

竹富町、伊江村の2つの離島での事例を記す。竹富町と伊江村はどちらも島内に高校がなく、子どもたちは中学校を卒業すると古里を離れざるを得ない。そのため、子どもたちは早い段階から将来の夢や目標・自立に向けたイメージの習得が必要である、自他の関係や将来の進路について思い悩むとき近くに心を許せる人物がいなくて感じてしまう、という両地域共通の悩みがある。そこで、早期から当プログラムを通して児童生徒に明確な将来像を描いてもらうと同時に、島内外で様々な職業や働き方に触れて多くの人と関わり、コミュニケーション力を身に付け、将来の進路選択の幅を広げ、多様な職業観・勤労観の育成につなげることを目的として取組んだ。

竹富町は、石垣島9つの有人島に13の小中学校が点在しており、全ての学校が学年1クラス少人数の極小規模で、子ども同士が学びを深め合うには十分な環境ではない。そこで、町内の3つの島の中学1年生を対象に生徒同士の交流も目的として当プログラムの全てを合同で実施した。当プログラム実施は石垣本島内で行い、それぞれの島にはない産業や職業に触れてもらう機会とした。

伊江村では、島内の小学校2校合同で6学年を対象とし、伊江村出身者が働く企業や伊江村にはない企業を中心に那覇市でジョブシャドウイングを実施した。子ども達にとって伊江村出身者が働く企業でジョブシャドウイングを行うことは、自身の自立に向けた将来像をイメージし、身近に感じることの

できるロールモデルを見ることができると同時に、多様な価値観を育み、幅広い職業観の育成へとつながった。また、2校合同の交流学習とすることで、学校間連携の体制も構築された。

竹富町と伊江村でのジョブシャドウイングは、島を離れてからも自分らしく生きていく大切さを大人達が子ども達に伝えていくことの重要性を改めて見出せた実践事例であった。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

ここでは、琉球大学教育学部と教育実践総合センターの連携した取組みを挙げる。実践に当たっては、学生が将来、学校現場で実践的なキャリア教育を行うときに、カリキュラムの作成やプログラムの構築ができるようシラバスを構築し、その流れに沿って支援した。また、学生がジョブシャドウイングの一連の工程を経験することにより、キャリア教育について実践的に学べる機会とすることを目指した。日常的に行っている研究授業にキャリア教育での実践的指導を加味した実践事例の構築を目指し、学生の質向上とその育成の在り方についても模索する機会とした。

成果としては、学生が附属小学校における小学生のジョブシャドウイング実施に協働することで、実践的なキャリア教育の手法を体験し、「キャリア教育とは何か」について考える機会となった。事前学習の指導計画の立案、授業の実施、ジョブシャドウイング当日の児童の引率、実施後の事後学習から発表会までの一連の流れを担うことで、キャリア教育についての理解を深めることができた。また、「キャリア」についての概念を深耕することができ、それぞれが「キャリア＝仕事」という固定観念を壊し、リセットする機会となった。「キャリアとは？」について議論を重ね、体験を重ねる中で、人の生き方全ての軌跡がキャリアとなることを確認することにもつながった。

この取組を通し、実践的なキャリア教育を学生時代に経験することが教員を目指す人材の育成にどのような効果をもたらすのか、教育実践総合センターとしても検証でき、学部としても継続的な育成プログラムの構築と特色ある大学づくりを模索する一助とすることができた。

活動実績

- 1.産学官連携協議会並びに運営会議の設置・運営支援並びにコーディネーター育成地区…12市町村
- 2.沖縄型ジョブシャドウイング実施支援（直接実施を含む）
 - ・平成26年度 小・中・高・大 計32校(1,581名)、受入事業所数443社
 - ・平成25年度 小・中・高・大 計30校(1,772名)、受入事業所数754社
 - ・平成24年度 小・中・高・大 計54校(3,377名)、受入事業所数754社
- 3.キャリア教育講演会(研修会)実績
 - ・平成26年度 校内研修会17講演(約150名)、児童生徒向け講演会13校(約3,600名)、保護者研修会5校(約120名)
 - ・平成25年度 教員向け研修会24校(641名)、保護者向け研修会21講演(2,349名)、
 - ・平成24年度 キャリア教育講演会27講演(約1,500名)
- 4.その他の周知啓蒙活動
 - ①職業人講話会 小・中・高・大・その他 計6,843名
 - ②パネル展：47回（公民館、沖縄県庁ロビー等）
 - ③イベントでのブース展運用：28回（世界のうちなーんちゅ大会、IT津梁まつり等）
 - ④七夕でグッジョブ：46校（4,466名）
 - ⑤市町村広報誌への記事掲載：24回
 - ⑥地域連携就業意識向上事業フォーラム：（約600名）



出発式での保護者サポーターの紹介



ジョブシャドウイング実践中

学校現場の評価・感想・コメント

●児童生徒のアンケートより

- ・働くのは自分の為じゃなくて人の為だと分かった。自分になりたい仕事につけるか自信がなかったけれど、ジョブシャドウイングで頑張ろうと思った。
- ・将来になりたい職業につくために、たくさん勉強をする。
- ・積極的に自分から出来るだけのチャンスを掴んで、当たり前前は当たり前前をやることを心掛けて頑張りたいと思う。

●学校現場のヒアリングより

- ・知らない人とも話せたことで自分自身に自信がついたようで、今まで寡黙だった生徒がジョブシャドウイングを終えてから、積極的に話し、自己表現が出来るようになった。
- ・教職員への校内研修でキャリア教育の視点や地域における学校の在り方、生徒や保護者、地域との関わり方を見直すきっかけとなった。

直接連携・協働していない関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

学校を中心としたキャリア教育の支援を徹底するとともに、地域連携の大切さや意義を伝え、地域で取組みを展開することで地域が主体となった連携体制の構築を行い、キャリア教育に取り組みやすい開かれた環境作りに尽力している。

産学官・地域社会が一体となった具体的な取組みとなっており協力性、継続性、実践性、発展性とも申し分のないものと評価している。（内閣府沖縄総合事務局経済産業部地域経済課）